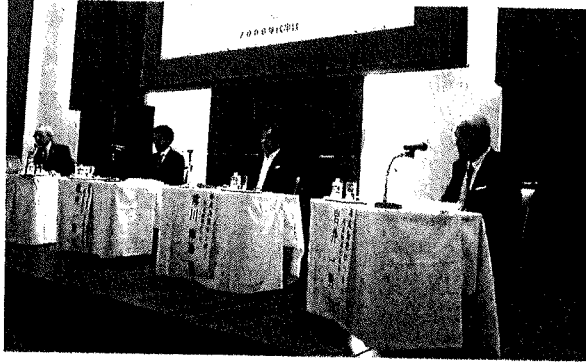


アジアのアパレル生産新時代を担う

●AAP設立7周年シンポジウムから

①



ベトナム・ラオス・カンボジア編 上

政井一哉 湯峰ソーイング専務
常川雅通 サンテイ社長
岩井一男 ロックス社長

出席者

臨場感があふれるセッションとなった

中国からシフトが進んだ6年間

アジア・アパレルものづくりネットワーク(AAP)はこのほど、都内で設立7周年記念シンポジウムを開いた。シエトロ(日本貿易振興機構)の小林恵介海外調査部アジア太平洋課課長代理による「チャイナプラスワンの現状とこれから」と題した基調講演に続いて、第2部として「アジアのアパレル生産新時代を担う」をテーマにした2回のパネルディスカッションを行った。パネリストはいずれもアジアでのものづくりの実際に関わっており、臨場感があふれるセッションとなった。

——アパレル生産にとってこの6年間はどんな状況だったか。
政井 6年前は中国での生産が中心だったが、この6年でベトナムが中心になった。

常川 中国生産の落ち込みをラオスの伸びでカバーしようとした。あっといふ間に6年が経過した。ラオス生産はまだ道半ば。これからの6年が大事だ。
岩井 チャイナプラスワンを探しに出たのがこの6年だった。カンボジアは識字率、労働争議などの問題があり、最初の3年は労働争議の対応に追われた。
——アジアの工場を取り巻く環境変化について。まずは人件費の動きは。

政井 ベトナムの第2工場として設立したMLB工場のエリアは、最低賃金が11年は50%だったが、16年には114%となった。実際の支払いはその1.5倍だったとこぼれた。
常川 ビエンチャンで三つの工場を構えているが、11年の最低賃

金は55%に対して今は90%。ただ、最低賃金では人が集まらないので、平均月収は11年で70%、今は170%。人件費はすぐ上がっている。
岩井 プノンペンに進出した11年は最低賃金が41%だったが、労働争議などを受けて急上昇。今は153%になっている。
——労働者の集まり具合は。

政井 第1工場が稼働した00年当時は苦労しなかったが、徐々に周囲の工場が増え、今は定着してもらおうのが精一杯。安心して働いてもらうために工場内に託児所を設けている。第2工場は周囲に工場がなく、募集すれば来てもらえる状況だ。
常川 ラオスは他の国に比べて人口が少なく、人は集めにくい。定着にも苦労している。独身寮や託児所を備えて定着率を上げてい

るので、色々コストがかかる。
岩井 12年ごろは募集しても集まらなかったが、福利厚生を充実させて各村で求人した。工員の口コミも広がり、今は募集していない。
——工場の経営、採算性、生産性は。

政井 第1工場は17年目に突入り、ここ数年はアイテム、レベルもワンランクアップした。5年目の第2工場はカジュアル中心というところもあり、シーズンごとの切り替えロスが大きく、軽減できるように努力している。
常川 ラオスの生産性は中国の70%程度。ただ、ラオスは土地の起伏が激しく水力発電が盛んで、電気料金はコスト面で助かっている。
岩井 賃金が大幅に上昇したため大変だが、生産性を高める努力をしている。生産性は中国の自社工場と比べると80%。ラインによっては70%といった感じだ。